

平成 26 年 6 月 17 日現在

機関番号：17301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22710253

研究課題名(和文) アフリカにおける低強度紛争の動態理解と平和構築に関する人類学的研究

研究課題名(英文) Understanding the dynamics of low intensity conflict and an anthropological study of peace-making

研究代表者

波佐間 逸博 (HAZAMA, Itsuhiro)

長崎大学・国際連携研究戦略本部・助教

研究者番号：20547997

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 690,000円

研究成果の概要(和文)：東アフリカ牧畜社会における暴力紛争を文化化していく政治・社会科学的言説を検討することをつうじて、植民地期以来の構造機能主義的な、均質で自己完結的な集団観と、稀少資源をめくり共約不可能な形で対立する利害集団モデルにもとづいた介入によって、低強度紛争が、かえっていっそう促進されている現実が生じていることを批判的にあぶりだした。また、東アフリカにおいて一般化している集合的暴力にたいする、牧畜社会における人びとの対処方法と、それらが創造され、活用されてきた社会的プロセスを記述、分析することによって、ローカルな共同体が独自に洗練させてきた牧畜世界の共生論理と実践をあきらかにした。

研究成果の概要(英文)：This study analyzed and described political social scientific discourse in which violent conflicts of pastoral societies in northeastern Uganda are culturalized. It critically elucidates the fact that low intensity conflicts have been increased by self-contained, structural-functionalistic, and closed conception of group, which originated during the colonial period, and intervention justified by conflict-of-interest model on which different groups confront each other for scarce resources. It revealed logic and practicality of social symbiosis among the life-world of pastoral peoples, which local communities have originally sophisticated with reference to coping methods of chronic collective violence among pastoral people, and social process in which they are created and used.

研究分野：地域研究

科研費の分科・細目：地域研究

キーワード：国家暴力 武装解除 牧畜 ウガンダ 東アフリカ 共生

1. 研究開始当初の背景

サハラ以南のアフリカのなかでも、とくに首都から遠くはなれ、国家による治安を維持する作用がおよんでいるとはいえない辺境地域では、急激に進行するグローバリゼーションのなかで、武装集団、テロリスト、犯罪集団といった、「不可視」のグループが主体となって、低強度紛争が多発していることが問題視されてきた。このような事態は、冷戦構造の崩壊後の世界における平和的共存を実現するために、解決がいそがれる重要な課題となっていた。

東アフリカにおける、紛争の解決にむけた外部介入のパスpekティブのなかで、辺境社会は一般に、集権化された権威や行政組織、国家法の効力がとどきにくく、枠外の住民の自由や人権にたいする脅威であるにとらえられてきた。このような、ホップズ的自然状態を下敷きにした展望のもとで、国家的秩序の全域化をはかることを、基本的なデザインとする介入に、地域の紛争の解決をゆだねてしまつてよいか、当事者社会の実情を理解することのうえにたつて再検討することが、切実にもとめられていた。

研究代表者はこれまでに、ケニア・南スーダン・ウガンダ三国国境に位置する牧畜諸社会において、生業の成立機構に関する生態人類学的研究をおこなってきた。その間、自動小銃をもちいた家畜略奪によって、牧畜民の集団のあいだで紛争がひきおこされており、これにたいする外部社会の手による武装解除介入がかえつて、地域の人びとを、集合的暴力やその不安にさらしているというケースを目のあたりにしてきた。そして、これまでの外部介入のあり方に再考をせまり、新しいオールタナティブを再想像する地平をきりひらきうる、ローカルなポテンシャルを解明する研究が着手されるべきであると思いついた。

2. 研究の目的

(1) 国家などが拠っている紛争理解モデルをのりこえることを、第一の研究目的とした。一般的な紛争理解モデルにおいて、暴力性は本質化される傾向がつよい。つまり、人間社会における暴力性は、人間の生物性や社会性にうめこまれた本質であるとみなされる。そして同時に、暴力はしばしば文化化の対象とされることもある。たとえば「牧畜民における好戦性」というステレオタイプを、牧畜家畜管理の一方的で統制的なハズバンドリーの在り方に由来すると解釈するという場合が典型的である。

そこで本研究では、まず暴力の本質化をしりぞけ、それをローカライズする道をとる。具体的には、ウガンダ北東部カラモジャ地

域における暴力紛争が、有力な政治家や軍人の発言、そして国際政治学の論文記述をつうじて文化化されていく理路を精査し、集団的暴力による牧民の生活被害が深刻化している要因との共犯関係を記述、分析する。そしてどのように特定の状況で暴力が生産、扇動、行使、無視、同定、訓練、制限、禁止されるのかに注目する。

(2) 第二の研究目的は、ローカルな牧畜共同体が独自に洗練させてきたトランススピーシーズな共生論理の実践性を、暴力のコンテキストにおいてあきらかにすることである。具体的には、ローカルな集団のあいだで発生する小規模な紛争が、民族間の全面戦争へとエスカレートすることが未然に回避されるプロセスにおいて、放牧の文脈で日常的に強調される、集団と個の階層構造の特異な在り方が、他者認識の基盤となっているという仮説を検証すること、低強度紛争状況におかれた牧民たちが集合的暴力に対処する方法と、それらが創造され、活用されてきた社会的プロセスを、生業牧畜の実践が秩序回復においてはたず社会的機能の側面から解明することである。

3. 研究の方法

(1) 研究期間をつうじて「低強度紛争」「武装解除」「平和強制」「正戦論」「平和構築」を主題とする国内外の関係文献を収集し、レビューをおこなった。文献調査の成果は、学術誌への投稿論文や学会および研究会における口頭発表をつうじて公表し、理論的な抽象度を高める比較検討の視座を獲得するために、アフリカ研究を専門とする研究者との討論の場をもうけた。

(2) ウガンダ共和国において現地調査を実施した。

北東部のカラモジャ地域のカリモジョンおよびドドスの牧民世帯において、民族集団や地域集団をこえる社会関係が、集団間の紛争抑止・解決にはたず役割や、「敵」という社会的カテゴリーが生成・実体化される機序をあきらかにし、外部社会による軍事介入と窮状、およびそれへの対応を解明するための資料(ライフストーリー、イベント・カレンダー、ランドスケープに銘刻された過去の生活経験など、個人や世帯内、地域社会の各レベルで蓄積された記憶の表象)を収集することを目的とした住み込み調査をおこなった。

首都カンパラにおいて総理府および防衛省を、牧畜地域において軍駐屯地を訪問し、紛争および武装解除政策の歴史、牧畜民と紛争にたいする意識に関するインタビューをおこなった。また、マケレレ大学で教鞭をとっている社会学者からは、北東部牧畜地域にたいする武装解除政策の継続と中断に関連

する政治情勢、北東部の治安状況と武装解除政策の関連について情報収集した。

4. 研究成果

(1) 家畜管理と家畜への価値づけにおける動物的他者との共生を焦点とする生態人類学と、東アフリカ牧畜文化論にもとづく存在論的な比較文化論の視座から、近代西洋的な支配と統治のメンタリティを批判的に記述・分析した。

(2) 植民地期に形成された、牧畜民の「啓蒙」意識にもとづく「説明」や「中和法」といった社会的装置をつうじて、現地住民の脱人間化が、武装解除政策下の現地社会において日常化していることをあきらかにした。

(3) 社会的なレジリエンス()とともに、そのレジリエンスが社会生活のうえでの秩序の持続をおびやかすリスクとなるというパラドクス()があきらかになった。

武装解除政策が実施されたことによって、武装の不均衡が生じたが、そのことでレイディングが激化した。そして、そのために、乳幼児の飢餓が深刻化するとともに、貧困世帯のメンバーを中心とする無数の人びとが(公式な難民認定をうけられない)国内避難民となっていった。こうした新しい苦境に対応するために、牧畜社会の人びとは、生存上の脅威となる銃や軍隊を、社会的な価値と実践のなかにたくみに組みこむことによって乾燥サヴァンナでの牧畜生活をつづけていた。たとえば、牧民たちが本来はきわめて遊動的であった放牧キャンプを、軍駐屯地に隣接させて構築・固定し、襲撃の危険がたかい夜間には国軍兵士を家畜のガードとして活用する苦肉の実践を採っていた。また、銃所持の容疑で不当に逮捕された仲間の牧民を軍の収容所から解放するために、婚資の家畜の構造的等価性を付与する文化的操作をつうじて自動小銃を入手し、これを軍側に「提出」していた。

このように、苦境に適応し、あるいは逆用して生存する牧民のタレントは、暴力的で不条理な外部介入を持続させるリスクともなりうる。たとえば、現地での治安維持活動の困難な陸軍兵士にかわり、スポット的に利用される地元の牧民が、軍から自動小銃を新規にあたえられていた。また、乳幼児の栄養の改善をめざして国際機関が配給した主食穀物(モロコシやトウモロコシ)の援助食糧は、母親たちによって現金獲得を目的とした醸造酒づくりの原料とされ、子の栄養状態の改善には直結せず、さらに、醸造酒の残滓を食べることが子の下痢症の最も主要な原因となっており、下痢症は、子の主要な死亡原因となっていた。そして、兵士への物資や金の支給がおくれがちな奥地においては、酒の支払いとして銃弾が兵士からさしだされ、女

性たちは地元の牧民たちの銃弾の供給源となっていた。

以上のように本研究は、当事者の生活実感と生存戦略をかえりみない、緊急行動主義的な社会介入が、政治的、構造的、集合的暴力を新規にひきおこしており、それによって、ローカルな日常が破壊されている生活の局面をえぐりだすことができた点で、きわめて意義深いものとなった。このような批判的人類学研究の成果は、現在実施している科研基盤(C)「ウガンダ ケニア国境地帯の政治的暴力と身体表現の関係」にうけつがれ、柔軟でたえまのない創造性をはらむローカリティを軸にした社会実践にむけ、理論的な普遍性を深化させるフェーズへと進展している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 10件)

1. Itsuhiko Hazama: "Book Review: Collectiveness among Youth and Their Individualization: Recent Transformation of the Age System of the Samburu in Kenya (Kenia Sanburu Syakai ni okeru Nenreitaikei no Henyō dōtai ni kansuru Kenkyū). Kyoko Nakamura, Kyoto: Shoukadou-Shoten, 2011, pp. 293 (in Japanese) "Nilo-Ethiopian Studies 18. 49-51 (2013), 査読有
2. 波佐間逸博: "牧畜家畜の個性性とコンタクト-北東ウガンダ牧畜民カリモジョンとドドスの事例から-" 生態人類学ニュースレター 18. 5-9 (2013), 査読無
3. 波佐間逸博: "北東ウガンダ東ナイロート社会における牧畜家畜と人間の共生的関係に関する研究" 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士論文. 1-376 (2012), 査読有
4. 波佐間逸博: "ウガンダ北東部カラモジャにおける武装解除の実施シークエンス" アジア・アフリカ地域研究 12(1). 26-60 (2012), 査読有
5. Itsuhiko Hazama: "Daily Life as Poetry: The Meaning of the Pastoral Songs of the Karimojong in Northeastern Uganda" Nilo-Ethiopian Studies 17. 27-49 (2012), 査読有
6. 波佐間逸博: "北東ウガンダ東ナイロート系ドドス社会の牧畜家畜をめぐる分類語彙とプラクティス" 生態人類学ニュースレター 17. 25-28 (2011), 査読無
7. 波佐間逸博: "書評 谷泰著『牧夫の誕生-羊・山羊の家畜化の開始とその展開』" 文化人類学 75. 621-624 (2011), 査読有
8. Itsuhiko Hazama: "A Review of Kaori Kawai's Works on Dodoth and Raiding"

Nomadic Peoples 14(2). 164-167 (2011), 査読無

9. Itsuhiro Hazama: "Book Review: Jiro Tanaka, Shun Sato, Kazuyoshi Sugawara, and Itaru Ohta (eds.) "Nomads: Living in the Wilderness of Africa"" Nomadic Peoples 14. 130-134 (2010), 査読有
10. 波佐間逸博: "北東アフリカ牧畜民の宿命論的な生" 長崎大学熱帯医学研究所同門会誌 39. 58-60 (2010), 査読無

〔学会発表〕(計 10 件)

1. 波佐間逸博: "北東ウガンダ東ナイロート社会における牧畜家畜と人間の共生的関係に関する研究" 2012 年度日本文化人類学会近畿地区研究懇談会・博士論文・修士論文発表会. (20130330). 国立民族学博物館
2. Itsuhiro Hazama: "Resonance of Creative Visions in Poetic Language among the Karimojong" The Second ISA Forum of Sociology Social Justice and Democratization 1-4, August 2012. (20120802). University of Buenos Aires, Argentina
3. 波佐間逸博: "武装解除される牧民の実践 北東ウガンダにおける非人間化システムからの解放のために" 日本文化人類学会第 46 回研究大会. (20120623). 広島大学
4. 波佐間逸博: "北東ウガンダ, カリモジョンにおける病いをめぐるライフストーリー" 日本アフリカ学会第 49 回学術大会. (20120527). 国立民族学博物館
5. 波佐間逸博: "カリモジョンの牧畜と健康の現状" 日本ナイル・エチオピア学会第 21 回学術大会. (20120422). 京都大学稲盛財団記念館
6. 波佐間逸博: "牧畜家畜の個性性とのコンタクト-北東ウガンダ牧畜民カリモジョンとドスの事例から-" 第 17 回生態人類学会研究大会. (20120326). 兵庫県姫路市
7. Itsuhiro Hazama: "Rethinking Cognition and Culture: Melodic Self-Domestication of Eastern Nilotic Pastoralists" Approaches and Methodologies of Field Research in Africa: Joint Symposium: JSPS NAIROBI & ILCAA AFRICA Project. (20110901-20110902). Nairobi Research Station, Japan Society for the Promotion of Science, Kenya
8. 波佐間逸博: "歌詞化された日常生活-北東ウガンダ・東ナイロート系牧畜民カリモジョンにおける牧歌の意味世界-" 日本アフリカ学会第 48 回学術大会. (20110521). 弘前大学
9. 波佐間逸博: "北東ウガンダ東ナイロート系社会における牧畜家畜をめぐる分類語彙とプラクティス" 第 16 回生態人類学会研究大会. (20110318). 京都大学稲盛財団記念館
10. 波佐間逸博: "北東ウガンダ武装暴力の動

態" アジア・アフリカ言語文化研究所基幹研究「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求に向けて」研究会. (20101102). 京都大学稲盛財団記念館

〔図書〕(計 6 件)

1. 波佐間逸博: "「ケニアの交通事情-ナイロビの乗り合いバスの運行主体と利用客」ケニアを知るための 55 章(松田素二・津田みわ編)" 明石書店. 192-196 (2012)
2. 波佐間逸博: "「日本人駐在員の暮らし-学振ナイロビの「成果」の舞台裏」ケニアを知るための 55 章(松田素二・津田みわ編)" 明石書店. 314-319 (2012)
3. 波佐間逸博: "「乾燥地における牧畜民の生活と生態環境-家畜との濃密な関係」ウガンダを知るための 53 章(吉田昌夫・白石壮一郎編)" 明石書店. 127-131 (2012)
4. 波佐間逸博: "「『未開』社会への近代火器の導入と流通-19 世紀後半から 20 世紀初頭におけるウガンダ北東部の銃」ウガンダを知るための 53 章(吉田昌夫・白石壮一郎編)" 明石書店. 295-298 (2012)
5. 波佐間逸博: "「コラム 9 カンパラのストリートファミリー」ウガンダを知るための 53 章(吉田昌夫・白石壮一郎編)" 明石書店. 210-211 (2012)
6. 波佐間逸博: "「コラム 15『ラウィノの歌』のレトリック」ウガンダを知るための 53 章(吉田昌夫・白石壮一郎編)" 明石書店. 266-268 (2012)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

<http://research.jimu.nagasaki-u.ac.jp/IST/ISTActId=FINJPDetai&ISTKidoKbn=&ISTErrorChkKbn=&ISTFormSetKbn=&ISTTokenChkKbn=&userId=100000374>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

波佐間 逸博 (HAZAMA, Itsuhiro)
長崎大学国際連携研究戦略本部・助教
研究者番号：20547997

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし